言葉の壁

動物応用科学科3年　宗兼 明香

これは、私がモンゴルで体験した話。

調査に使うための牛の糞をもらおうと、べぇさん（大津さん）と乳搾りをする女性にジェスチャーで話しかけた。「糞をください」というモンゴル語はモンゴル語会話の本にどこにも載っていなかった。「サエンバイノー（こんにちは）」挨拶をした。私達はバケツを持って糞を指差し、バケツの中に入れる素振りを見せた。すると、女性は私達に乳搾りを勧めてくれた。どうやら、ミルクをもらいにきたと思われたようだ。糞を「フン！フン！」と言って懸命に指を指しているのに、女性は「アー…」とうなずきながら牛の乳を搾る素振りを見せる。何て言えばいいか分からない、ジェスチャーも通じない。どうしようと焦った。通訳の人がやってきてモンゴル語で一言、言葉をかけると、女性はニッコリと笑って新鮮な牛の糞がたくさんあるところを指差した。

この時、「よかった」と思ったのと同時に、女性の行動に優しさを感じた。つなぎを着たモンゴル語もわからない外国人がバケツを持ってやってきて何か話しかけている。もしここが日本なら、不審がられるかもしれない。増してや、糞をもらいにきたと知ると、「何だこの人達は」と、嫌な顔をするだろう。しかし、女性はそのような行動を見せることなく、見ず知らずの外国人に乳搾りを勧めたり、新鮮な糞があるところを教えてくれたりと、とても親切にしてくれた。

「言葉の壁体験談」はまだ続く。花虫（訪花昆虫）の調査中、木を刈り取るために大きな鎌を持った集団が私と藤本さんのところにやってきて話しかけてきた。おそらく「ここで何をしているんだ？」ということを聞いてきたのだろう。挨拶の言葉が思い浮かばず固まる私達の横で、通訳の人が「ここは調査中だから通らないでくれ」と言ったようで、鎌を持った男性は笑いながらふざけて鎌で植物を刈る仕草を見せた。気さくに話しかけてくれたのだが、鎌を振り回すので私は笑顔をつくろうとしたが強ばってしまった。

今までも、外国人との会話で言葉の壁は厚いと感じていた。実際、通じなかったことが何度もあった。フスタイ国立公園で車にいたら西洋人に挨拶されたので、元気よく挨拶し返したら「あなたラクダに一緒に乗った子よね！？」と英語で聞かれた。そのとき何のことかよくわからず、「えっ」と固まってしまった。一つ一つの単語を聞き取ろうと言葉に集中してしまい、最終的に言っていることがわからなくなった。英語なら今まで勉強していたのだから、何とかわかるだろうと安易に考えていたように思う。

しかし、モンゴルの人は理解しようと聞き返してくれたり、通じなくとも笑顔で話したりしてくれた。ブルガンでお世話になったスレンさんという方が、調査の休憩に食べなさいと軽食をくれたことがあった。もちろん、モンゴル語を言いながら渡されたのだが、スレンさんが伝えるジェスチャーや言葉の中に込められた気持ちで何となくわかった。一つ一つの意味が分からなくても、話しかける人が伝えようとすることが感じられ、内容を少し理解することができた。

今回、挨拶程度のモンゴル語を覚えただけだったが、相手の行動や気持ちを理解することで言葉がわからなくても意思の疎通ができるのだと実感し、それがとても嬉しかった。モンゴル人の優しさに触れ、気さくに話しかけられることで、警戒したり、怖いと感じていた心が大らかになれることを知った。モンゴルの人の心はモンゴルの大地のように広くて暖かい。モンゴル人になりきれば、言葉の壁は乗り越えることができそうな気がした。

日本人

モンゴル人(?)